

朗読劇「あの世へ続く屋形船」 (初稿)

脚本 相良 真美

《登場人物表》

○東山 洋子^{ようこ} …… 専業主婦

○西畑 守^{まもる} …… 会社員

○南田 ユウキ …… 高校生

○北村 茂造^{しげぞう} …… 老人

○東山 文雄 …… 洋子の夫

○西畑 たみ子 …… 守の妻

○南田 美智代 …… ユウキの母

○北村 節子 …… 茂造の妻

○屋形船・乗組員 (男女どちらでも可)

○ナレーション (男女どちらでも可)

《概要》

三途の川のほとりに停まっている、一艘の屋形船。
この屋形船は「三途の川」を越えてあの世へと行く
人々を静かに運んでいく。
そこに乗り込んできた、世代が違う様々な乗客たちの
行く末は……。

《脚本》

○三途の川のほとり・屋形船乗り場

一艘の屋形船が停まっている。

N「ここは、日本のどこかにある、川のほとり。あの世へ行くために、死にゆく人々が渡る『三途の川』のほとりです。そこに、一艘の屋形船が停まっています」

守「屋形船に乗ってあの世へ行くのかあ。神様って面白いことするんだな」

N「会社員の西畑守は、せっかくだからと、屋形船を楽しむことにしました」

洋子「死んだと思ったら、いきなり屋形船に乗れなんて……私、方向音痴なのに……屋形船乗り場、どこかしら？」

N「専業主婦の東山洋子は、屋形船乗り場を探すのに、苦労しています」

ユウキ「だっせえ。あの世へ行くのに、何で屋形船に乗んなきゃなんねえんだよ」

N「高校生の西畑守は、屋形船に乗ることに戸惑っていました」

茂造「屋形船、何年振りだろう。バブルの頃はよく乗ったなあ。おお、乗り場はここか」

N「年金暮らしの北村茂造は、あの世で妻に会えるのを楽しみにしていました」

乗組員「屋形船、まもなく出発いたします。ご乗船のお客様、いらっしやいますでしょうか？」

守「あ、私、乗ります」

茂造「私も」

ユウキ「(手を挙げて) はい……」

洋子「(遠くから走ってきて) すみませ〜ん。乗ります」
乗組員「皆さんお揃いですね。それでは、出発いたします」

N「清らかな川の流れはおだやかです。守、洋子、ユウキ、茂造を乗せた屋形船は、あの世へと旅立ちます」

守「(窓の外を見て) お〜、夜景がきれいだあ」

洋子「ホント。キレイですね」

N「守、洋子、ユウキ、茂造は、それぞれの人生を終え、あの世へと旅立っていきました」

SE「屋形船の汽笛の音」

N「朗読劇・あの世へ続く屋形船」

守・洋子・茂造「(それぞれ) いただきます」

ユウキ「(めんどくさそうに) ……いただきます」

茂造「天ぷらに刺身に、おまけに焼き焼きまで。年寄りになると、食が細くなりましてね。全部食べられるかな」

N「あの世へ到着するまで、屋形船の乗客には、最後の晩餐、豪華な料理がふるまわれます」

ユウキ「……チーズバーガーの方が良かったな」

乗組員「申し訳ございません。お若い方が亡くなるのは稀ですので、若者向けのお料理、ご用意がなくて」

洋子「(食べて) んゝ天ぷらサクサク」

守「焼き焼きの肉、霜降りだ。至れり尽くせりで、死ぬのも案外悪くないかもしれませんね」

洋子「ホント。死にたくなかったけど、死んでよかったかもゝ、なんちゃって……」

乗組員「お客様、厳密に申しますと、あの世へ行くまでは、皆様方は、まだ死んではおりません」

守「え、俺たち、まだ死んでないんだ……」

洋子「じゃあ私たち、生き返る場合もあるってこと!？」

茂造「いやゝでも死に方によつては無理でしょう。私みたいな老衰では、さすがに生き返れないでしょうな」

洋子「老衰なんて羨ましい。大往生じゃないですか」

茂造「(照れて) いやいや」

洋子「あゝあ、おばあちゃんになるまで長生きしたかったなあ……」

守「ちなみに奥さんは、どんなご病気です？」

洋子「私は、昨日からずっと頭が痛くて。でもいつもの片頭痛だと思って、病院へ行かずに、我慢してたんです。でも、今日の朝、朝ごはんの支度をしてる最中に、バタンと倒れちゃって……脳梗塞でした」

守「私は心臓です。なんだか最近、左肩だけ妙に痛いなあと

思ってたなら、職場で倒れて、救急車で運ばれて……心筋梗塞」

茂造「お二人とも、働き盛りの突然死ってやつですな……」

洋子「女の平均寿命、88歳とかですよ？　こんなに早く

死んじゃうなんて……なんか損しちゃった」

茂造「(ユウキに) ちなみに僕は？　随分お若いけど？」

洋子「体が弱かったのかしら？」

ユウキ「……いえ。死にたかったんで」

守「！　自殺か……」

茂造「もったいない……」

ユウキ「……ごちそうさまでした」

洋子「え、もう！？　全然食べてないじゃない」

ユウキ「……食べたくないんで」

N「ユウキが席を離れようとしたその時、屋形船は、急にスピードを落としました」

乗組員「お客様に申し上げます。現世からの指令により、近くの波止場に、緊急停止させていただきます」

洋子「え、どういうこと!？」

守「トラブルでもあったんですかね？」

○とある波止場

N「屋形船は、近くの波止場に、停まりました。波止場の向こうは、現世です。屋形船に向かって、現世の人々が、必死に呼びかけています」

ユウキの母・美智代。

美智代「ユウキ！　ユウキ！」

ユウキ「！　ママ……」

N「波止場の向こうで、ユウキの母・美智代が、泣きながらユウキに呼びかけます」

洋子の夫・文雄。

文雄「洋子！　洋子！」

洋子「！　あなた……」

N「洋子の夫・文雄も、泣きながら洋子に呼びかけます」

守の妻・たみ子。

たみ「守さん！ 戻ってきて、お願い！」

守「！ たみ子……」

N「守の妻・たみ子も、泣きながら守に呼びかけます。あの世へ行ってしまう、守、洋子、ユウキのことを、それぞれの家族が、必死に引き留めているのです」

文雄「洋子、ごめんよ。昨日頭が痛いつて言つてた時、俺が無理やりにでも病院に連れてつていれば、こんなことは……ごめん、洋子」

洋子「文雄さん……」

たみ子「守さん、昨日のケンカ、まだ仲直りしてないじゃない……死んじや嫌……ごめんなさいつてちゃんと言うから、戻ってきて。お願い」

守「たみ子……」

美智代「ユウキ、帰ってきて。ママが悪かった。学校の成績、学年トップじゃなきゃ許さないなんて言わない。百点取れなかったらご飯は抜きなんて言わない。東大に行かないなら、あなたを息子とは認めないなんて言わない。だからお願い。戻ってきて」

ユウキ「ママ……」

乗組員「守様、洋子様、ユウキ様、屋形船から降りられますか？」

守「え、俺たち、屋形船から降りていいんですか！？」

洋子「私たち、生き返れるつてこと！？」

乗組員「皆さんのご家族に、こんなにも反対されては、我々乗組員は、無理やり皆さんをあの世へお連れすることはできません。あの世へ行くか、ご家族のもとへ戻るか、ご自身がお決めください」

守「じゃあ俺、戻らせてもらいます。だって、人生でやり残したことが、いっぱいありますし」

洋子「もちろん私も」

乗組員「かしこまりました。ですが守様は、心筋梗塞の後遺症で、車椅子生活になる可能性がございます」

守「車椅子生活……」

乗組員「洋子様は、脳梗塞の後遺症で、手足が不自由になる

可能性がございました」

洋子「手足が不自由……」

乗組員「それでもよろしいですか？」

守「どうしよう……いやでもそれは困るな、一生車椅子生活なんて」

洋子「そうよ。健康な体で戻してもらわないと。手足が不自由になったら、私どうやって生きていけばいいの……」

守「一生不自由な生活なんて、生きてる意味がないよ。だったら、死んだ方がマシかもしれない……」

たみ子「守さん、車椅子生活が何よ。守さんが会社クビになったら、私が働く。私があなたを支えるから。私たち、約束したじゃない。病める時も健やかなる時もずっと一緒にいるって。私を一人にしないで、お願い、守さん」

守「たみ子……」

文雄「洋子、手足が不自由になっても、生きてくれよ。金婚式迎えるくらい、お互い長生きしようよ。俺、みそ汁ぐらいしか作れないけど、料理覚えるから。今までお前が支えてくれてた分、今度は俺が支えるよ」

洋子「文雄さん……」

乗組員「守様、洋子様」

たみ子・文雄「(それぞれ言い) 戻ってきてー」

守「……車椅子生活……リハビリすれば、ちよつとは歩けるようになるかな」

茂造「大丈夫ですよ。医学は日々進歩してますし」

洋子「……リハビリか……私、耐えられるかな。でも私、運動嫌いなんだよなあ……」

茂造「頑張れますよ。ご家族と一緒になら。頑張りなさい。あなたたちはまだ若い。何回でもやり直せる」

洋子「私たちは、まだ若い……」

守「何回でもやり直せる……」

乗組員「では、よろしいですね？」

洋子「はい」

守「家族のもとへ、戻ります」

乗組員「かしこまりました。守様、洋子様、屋形船から降り

られます」

茂造「守さん、洋子さん、さようなら……」

守・洋子「(それぞれ言い) さようなら……」

茂造「夫婦仲良く、末永く、添い遂げるんだぞ……」

N「守と洋子は、屋形船を降り、家族のもとへ戻っていきま
した」

茂造「(ユウキに) 僕、僕はどするんだい?」

ユウキ「僕は……戻らないよ」

乗組員「ユウキ様、お時間です。どうされますか?」

茂造「ユウキくん、君はまだ若い。まだ高校生だろう。年寄
りの私と同じ日に死んじゃダメだ」

ユウキ「でも……」

洋子「戻りなさい。お母さんのところへ」

ユウキ「ママが嫌だから、僕は自殺したんだ。だから戻れな
い。戻りたくないんだよ」

茂造「母親のことがどんなに嫌いでも、逃げちゃダメだ。お
母さんは鬼じゃない。君が正直な気持ちをお母さんにぶ
つけば、きっと分かってくれる」

ユウキ「……でも」

茂造「今あの世へ行っちゃって、何も解決なんかしないよ。君
の心は、永遠に暗いままさ」

乗組員「ユウキ様、どうされますか?」

美智代「ユウキ! お願い! 戻ってきて」

茂造「自殺するほど追い込まれた息子を見て、変わらない親
なんていない。今ならきつと、お母さんと分かり合え
る。だから戻りなさい。戻るんだ」

乗組員「ユウキ様は、病院搬送が迅速だったため、後遺症も
無く、今まで通りのお姿で、現世にお戻りいただけま
す」

ユウキ「え、ホントですか!?!」

茂造「素晴らしいじゃないか。君は神様に生かされたんだ。
大丈夫。君ならできる。自分の人生、最後まで生き抜く
んだ」

ユウキ「……うん」

乗組員「ユウキ様、屋形船から降りられます」

茂造「ユウキくん、さようなら……」

ユウキ「さようなら……」

茂造「自分の人生、今度こそ、楽しむんだぞ……」

N「ユウキは屋形船を降り、家族のもとへ戻っていきました」

乗組員「大変長らくお待たせいたしました。屋形船、再び出航いたします」

N「屋形船は、三途の川を、おだやかに進んでいきます。そしてようやく、あの世のほとりに、たどり着きました」

○あの世の入り口

茂造「ここがあの世というものか……夕日がきれいだ……ひとりぼっちの長旅、なんだか疲れてしまったよ」

茂造の妻・節子。

節子「茂造さん」

茂造「(感動して) おお、節子……久しぶり」

節子「お久しぶりでございます」

N「茂造の妻・節子が、茂造を出迎えます。節子は茂造よりも早く、あの世へと来ていました」

節子「一人であの世へ行くのが、なんだか寂しくてね、ずっとここで、茂造さんをお待ちしていました。あそこがあの世への入り口だそうですよ。一緒に参りましょう」

茂造「ああ(行こう)……節子、随分待たせてしまったね」

節子「大往生、本当にお疲れさまでした……茂造さん」

茂造「何だい？」

節子「あの世へ行く道、年寄りには少々大変なようですよ。だから、手を取り合って行きましょう。年寄りは転びやすいですからね」

茂造「そうだね。久しぶりに、そうしよう」

N「茂造と節子は、二人で手を取り合いながら、ゆっくりゆつくり歩いていきました。そうして無事に、あの世へと辿り着きました。おしどり夫婦だった茂造と節子は、あの世でも仲睦まじく穏やかに暮らしましたとき」(終)